



肥後風



多葉蓮



全花蓮

Ⅱ

人生に
口づけする言葉

美しい日本語
荷風

永井荷風

持田叙子・高柳克弘〔編著〕

美しい日本語 荷風 II 人生に口づけする言葉 目次

第一部 荷風 散文・詩より

持田叙子 5

時を知る人 6

小さな幸せの花束

砂糖 8

恋人 15

燈火の巷 20

散柳窓夕栄 36

日和下駄 47

快活なる運河の都とせよ

草箒 62

机辺の記 71

きのうの淵 79

恋の蜜、官能の焰

午すぎ 90

すみだ川 94

第二部

荷風
俳句より

腕くらべ
つゆのあとさき
寝顔
踊子
おもかげ
裸体

*

190 180 165 158 128 112

高柳克弘

第一部

荷風
散文・詩より

持田叙子

時を知る人

勤労時間、食事時間、睡眠時間……。いろいろな時間がある。私たちは腕時計を身につけ、つねに細切れの時間を追う。しかし真に時間を知り、理解しているであろうか。

永井荷風という人は、人生という残酷で美しい時間を熟知していた。ついには全て消える。けつきよくは無。無に沈んでゆく人生時間を、極限まで深く美味しくあじわおうとした。彼の文学は、時の知者の文学とも言える。

たとえば瞬間の幸福を重んじた。茶屋での昼寝、ざめ、飲み残した盃に春空の青い色が映っていたこと。暮れゆく川に降る雪を大好きな友とながめたこと。過去も鮮やかにあじわい返した。あたたかく抱いてくれた母の膝。そつとのぞいた祭日のにぎわい。異なる関係性の弧につらなる儂く美しい時間が、彼のころに何層も積もる。

ぼやぼや生きてはもったいない。つねに感じ考え、主体的に人生を歩くこと。いとしい人の顔を両手ではさんでそつと口づけするように、彼の文学は人生という時間を愛する術を私たちに教えてくれる。

小さな幸せの花束

砂糖

大正十年、一九二一年十月、「国粹」に発表された随筆である。翌十一年七月、春陽堂より刊行された小説・戯曲・随筆集『雨瀟瀟』におさめられた。全文をかかげる。

病めるが上にも年々更に新しき病を増すわたしの健康は、譬たとえて見れば雨の漏る古家か虫の喰った老樹の如きものであろう。雨の漏るたび壁は落ち柱は腐って行きながら古家は案外風にも吹き倒されずに立っているものである。虫にくわれた老樹の幹は年々うつろになつて行きながら枯れたかと思う頃、哀れにも芽を吹く事がある。

先頃掛りつけの医者からわたしは砂糖分を含む飲食物を節減するようにとの注意を受けた。たれが言い初めたか青春の歓楽を甘き蜜に酔うといい、悲痛艱苦かんくの経験をととえて世の辛酸しんさんを嘗なめると言う。甘き味あじわいの口に快きはいうまでもない事である。

わが身既に久しく世の辛酸を嘗めるに飽きている折から、今やわが口俄にわかにまた甘きものを断ねばならぬ。身は心と共に辛からき思いに押しひしがれて遂には塩鮭しんせいの如くにならねば幸さいわいである。

午にも晩にも食事の度々わたしは強い珈琲コーヒにコニヤックもしくはキュイラソオを濺そそぎ、角砂糖をば大抵三ツほども入れていた。食事の折のみならず著作につかれた午後または読書に倦うん

だ夜半にもわたしはしばしば珈琲を沸かすことを楽しみとした。

珈琲の中でわたしの最も好むものは土耳其の珈琲であった。トルコ珈琲のすこし酸いような渋い味は埃及煙草の香氣によく調和するばかりでない。仏蘭西オリヤンタリズムの芸術をよろこび迎えるわたしにはゴーチエーやロッチの文学ビゼやブリュノオが音楽を思出させるたりともなるからであった。

いつ時分からわたしは珈琲を嗜み初めたか明かに記憶していない。しかし二十四歳の秋亞米利加へ行く汽船の食堂においてわたしは既に英国風の紅茶よりも仏蘭西風の珈琲を喜んでいた事を覚えてゐる。紐育に滞留して仏蘭西人の家に起臥すること三年、珈琲と葡萄酒とは帰国の後十幾年に及ぶ今日まで遂に全く廃する事のできぬ者となつた。

蜀山人が長崎の事を記した瓊浦又綴に珈琲のことをば豆を煎りたるもの焦臭くて食うべからずとしてある。わたしは柳橋の小家に三味線をひいていた頃、又は新橋の妓家から手拭さげて朝湯に行つた頃——かかる放蕩の生涯が江戸戯作者風の著述をなすに必要であると信じていた頃にも、わたしはどうしても珈琲をやめる事ができなかった。

各人日常の習慣と嗜好とはおよそ三十代から四十前後にかけて定まるものである。中年の習慣は永く捨てがたいものである。捨て難い中年の習慣と嗜好とを一生涯改めずに済む人は幸福である。老境に入つて俄に半生慣れ親んで来たものを棄て排けるは真に忍び難い。年老いては古きをしりぞけて新しきものに慣れ親しもうとしても既にその氣力なく又時間もない。

珈琲と共にわたしはまた数年飲み慣れたシヨコラをも廃さなければならぬ。数年来わたしは独居の生活の氣儘なるを喜んだ代り、炊事の不便に苦しみいつとはなく米飯を廃して麵麩のみを食していた。塩辛き味噌汁の代りに毎朝甘きシヨコラを啜っていた。歐洲戦争の当時舶来の食料品のはなはだ払底であった頃にもわたしは百方手を尽して仏蘭西製のシヨコラを買っていたのである。

巴里の街の散歩を喜んだ人は皆知っているのであろう。あのシヨコラムニエーと書いた卑俗な広告は、セーン河を往復する河船の舳や町の辻々の広告塔に芝居や寄席の番組と共に張付けられてあつた。わたしは毎朝顔を洗う前寢床の中で暖かいシヨコラを啜ろうと半身を起す時、枕元には昨夜読みながら眠つた巴里の新聞や雑誌の投げ出されてあるのを見返りながら、折々はわれにもあらず十幾年昔の事を思出すのである。

巴里の宿屋に朝目をさまざまシヨコラを啜ろうとて起き直る時窓外の裏町をば角笛吹いて山羊の乳を売行く女の声。ソルボンの大時計の沈んだ音。またリヨンの下宿に朝な朝な耳にしたロオン河の水の音。これらはすべて泡立つシヨコラの暖かい煙につれて今も尚ありありと思ひ出されるものを。医師の警告は今や飲食に関する凡ての快樂と追想とを奪い去つた。口に甘きものは和洋の別なくわたしの身には全く無用のものとなつた。

たしかリユキザンブルの画廊だと覚えてゐる。クロードモネーが名画の中に食事の佳人は既に去つて花壇に近き木蔭の食卓には空しき盞と菓子果物を盛つた鉢との置きすてられたさまを描いたものがあつた。突然わたしがこの油絵を思い起したのは木の葉を縫う夏の日光の真白き

卓布たくふの面に落ちかかる色彩の妙味のためではない。この製作に現われた如き幸福平和にしてしかも詩趣に富んだ生活に対する羨望と実感とのためである。

父の世に在った頃大久保の家には大きな紫檀したんの卓子たくしの上に折々支那の饅頭や果物が青磁の鉢や籐編とうあみの籃かごに盛られてあつた。わたしはこれをは室内の光景扁額へんがく書幅の題詩などと見くらべてしばしば文人画ぶんじんがの様式と精神とを賞美した。

浮世絵を好む人は蕙齋けいさいや北齋ほくさいらの描ける摺物すりものに江戸特殊の菓子野菜果実等の好図画あるを知っているであろう。桜花散り来る竹縁ちくえんに草餅くさもちを載せた盆ぼんの置かれたる、水草蛭籠はたごなぞに心天しんてんをあしらいたる、或は銀杏ぎんぎょの葉散る掛茶屋かけぢやの床几しよごきに団子だんごを描きたる。これらの図に対する鑑賞の興はけだし狂歌俳諧の素養すよう如何いかんに基く事、今更論ずるまでもない。

才牛さいごうが老の楽たのしみに「くず砂糖水草清し江戸だより」というような句があつたと記憶している。

作者の名を忘れたが、これも江戸座の句に「隅田川はるばる来ぬれ瓜うりの皮」というのがあつた。詩文の興あれば食くらうもの口舌くわたくの外更ほかに別種の味を生ず。袁随園えんずいえんの全集には料理の法を論じた食単しょくたんなるものがある。明治初年西田春耕しのだしゅんこうという文人画家は嗜口小史しこうしゆしを著して当時知名の士の嗜み食くらうものを説明した。いづれも当時文化の爛熟を思わしむるに足る。

われら今の世に興味を説くは木によじて魚を求むるにひとしい。わが医師わが身に禁ずるに甘きものを以てしたるは或はこの上もなき幸いであるやも知れぬ。もはや都下の酒樓しゆろうに上つて盃盤はいばんの俗悪を歎くの虞おそれなく、銀座を散策して珈琲の匂いなきを憤る必要もない。

荷風らしい嘆き節ではじまる。

もはや「わたし」は古家か老いた樹にひとしい。世のしょっぱい辛さもあじわい尽くした。それなのに今さらにホームドクターより大好きな甘いものを禁じられた、と口をひらく。このとき四十二歳。麻布の偏奇館に住みついてほどない。じっさい『断腸亭日乗』のこの年六月九日には、かかりつけの中洲病院にて「尿中糖分多し」という診断を受け、悲観している。

ああ、角砂糖を三つ入れた大好きな珈琲。それももう夢か、というところから俄かに勢いづいて荷風は偏愛する珈琲とシヨコラについてのびのびと語り、過去の幸せなあまい時間を自在に行き来する。

ちやうど十年前、明治四十四年に『紅茶の後』と題する随筆集をもつ著者にしては、紅茶を愛さない荷風なのである。あらためて、あれはなぜ『珈琲の後』と題されなかつたのか不思議に思うが、あの当時は荷風もまだ若かつた。「紙よりも薄い」チャイナ・ボーンの白磁のカップにゆらゆら薫る、レモン入り紅茶の淡いうすべに色の方がよく似あう貴公子だつたのだ。

珈琲。日乗にもしょっちゅう出てくる、荷風の毎日に無くてはならない嗜好品である。ぜったいの字で書かれる。コーヒーとは断じて書かない。

好みはトルコ珈琲。黒い悪魔のようにつよくスパイシーで、酩酊と陶酔をよしとするオリエンタル文化に通ずる。それに——そうだ、シヨコラも味わえない。こちらはフランスでならい覚えた。リヨンでもパリでも、朝めざめたベッドの中ですすするシヨコラのあたたかい甘さが、いかにもあこがれの西欧という感じだつた。ふわつとした香りの空気にひびいて来たミルク売りの笛の音もロー

ン河のさざ波も、今はすべて夢か——。

荷風の言うシヨコラとは、つまりは飲用のチョコレートを指す。カカオに砂糖を混ぜ、水か牛乳に溶かす。十八世紀から栄養ある飲みものとして流行し、フランス人がとりわけ好む。文化史家の春山行夫によれば、パリのCHOCOLATの宣伝ポスターには芸術的なすぐれた絵がめだつという。アールヌーボー風のやわらかい曲線をつかって、女性や少女がお茶やシヨコラをたしなむ風景を描く。

ちょうど荷風がパリにいたのは、消費文化の隆盛にともない商業美術がおおきく進化した時代で、街の生活のそここを飾る「卑俗」で可愛いおしゃれな大衆複製芸術、すなわちポスターや看板をうっとり目にとめていた様子もうかがわれる。

中階階層の暮らしの小さな幸福を描くことは、二十世紀の入口の絵画に画期的に求められた新鮮なテーマでもある。王侯貴族にささげられる豪華な絵の代わりに台頭した。

かつてルクサンブル美術館かいわいの画廊を訪ねた荷風が、おだやかなティータイムを描く絵として心に刻むモネの絵とは、おそらく一八七二年に発表されたクロード・モネの〈午餐〉である。初夏の庭を描く。木陰のテーブルが主人公。今しもご婦人方のおしゃべりは終わり、卓上にはティーカップ、銀のポット、パンや美しく盛られた果実が残る。地べたにすわって無心に積み木で遊びつづける男の子の頭のずつと上には、木の枝にかけて誰かが忘れた優美な白い帽子のリボンがひらひら風にゆれている……。

鮮やかに私たちにも見える。これが荷風のこころの中心を占める一つの理想、「幸福平和」な人

生の風景なのだ。

庭の花や木々となかよく暮らす。毎日、庭の木の下にテーブルを出し、おやつを楽しむ。お菓子や珈琲、シヨコラ、煙草は日々の幸福をいろどる。しかし戦いが始まれば、それら嗜好品はまず真っ先に切られる。すぐに姿を消す。逆にいえば平和の象徴である。

さいごは和漢文をなごやかに折衷するお菓子おやつの小さな文化史で綴じられる。中国を愛した実家には中華菓子がしばしば置かれていた。唐まんじゅうが、卓上のふくよかな中国磁器に盛り立てているのはみごとだった。

日常のミクロをたいせつにする江戸の浮世絵と俳句においては、季節を伝える和のおやつは重要な主題である。草もちやところてん、お団子はよく描かれ、よく詠まれる。大グルメ国の中国には早くに美食を論ずる古典があるし、今よりずっと開明的な明治初期には美味と口福について綴るエッセイもちゃんとあった。いずれも文化の高さをものがたる。

おやつを楽しむゆとりこそは平和の象徴。毎日のティータイムは幸福のあかし。あまいもの制限の不機嫌をふり払い、荷風は大正も末の世に、ユニークで地に足のついたおやつ愛、すなわち小さな平和宣言をかかげる。

恋人

明治四十二年、一九〇九年に刊行された『ふらんす物語』におさめられた小品。散文詩とも小説ともつかぬ筆致である。単行本の刊行に先立ち、「紅燈集」の題名でまず雑誌「趣味」に一九〇八年十二月に発表された四つの小品のうちの一つである。冒頭より抄出する。

凡そ、悲しきも、嬉しきも、目に触るゝ巴里の巷の、活ける浮世の芝居のさま、一ツとして我が心を打たざるはなき中に、殊更われの忘るゝ事能はざるは、料理屋カツフエー、アメリカンの夜半に、シャンパン飲みみて舞ひあたる、一双の若き舞踏者を見し事なり。

白き壁と柱の飾りを金色に塗り立て、天井よりは見事なる燭花を下げ、窓々には天鵞絨の帷幕重々しく、さほどには広からぬ一室なり。四方には真白き布したるテーブルを据え、芝居帰りの夜装せる男女酒を飲み、室の片隅には、三人の髪黒き西班牙の舞姫と一人の黒奴控へて、客の請ふがまゝに、赤き揃ひの衣着たる楽人の奏楽につれ、西班牙の足踏み鳴らす乱舞をなす。

この目覚ましき踊りの一くさはりは終りぬ。人々は喝采せり。ビオロン弾きは曲の調子を変じて、ワルスを奏し出しぬ。波の動くが如き、緩かなるその曲調は、自ら客をして卓を離れしめ、

出で、舞ふべく促すが如し。

独り、杯に対したる髪白き老紳士あり。衆に先じて、若きが中にも又若き西班牙の舞姫が手をとりぬ。幾組の男女つゞいて舞ひ出す。男は皆、面立厳めしく年ふけたり。昼の中は責ある職を負へる人々にや。女もかゝる歓楽と栄華を身の職業に、幾年を一夜の夢のごとく送りなす輩の如く見ゆ。われは突然、わがテーブルの傍を舞過る若き一組あるに驚かされぬ。

若かりし。いとも若かりしよ。男は十九を越えざらん。女は十六か十七か。何れも丈高からずして瘦せられたれば、肥えて年とりたる人々の中に交りては、さながら人形の舞へるに異ならず。されど、その舞ふさま、足の踏むさまは、秀で、美しかりき、巧みなりき。

未だ嘗て、われはかくも似合ひたる舞踏者の一对を見たる事なし。相抱く二人の身は、同じき一つの魂によりて動かさるゝが如く見えぬ。男のそれに触れんばかりに近づけたる女の唇は、舞ふ度に迫まる呼吸の急しさに、開きて正に落ちんとする花弁の如くに分たれたり。その眼は幸福の影より外、何物をも見ざるが如く閉されたれど、折々は口の端に湧出る微笑と共に打開きて、見下す男の眼と相合ふ。あまりに近けたれば、二人は潤ひ輝ける瞳子のみにして却て、美しきその面を見る事能はざりしなるべし。

ワルスの調はやゝ急しくなりぬ。横笛の音、ピアノの轟きの中に、晴れやかなる喜びのメロデーを歌へども、その高きより低きに、低きより高きに移る折々、ピアノの長き震調は、云ふべからざる悲愁をわが胸に伝へぬ。そも、ワルスは喜ばしき舞の曲ならざるか。

争ひと教へとは、あまりに人を急しく、賢からしめし今の世に、われはかゝる美少年、かゝ

る少女の相抱いて舞ふさまを見る事の、嬉しきに過ぎて、その定めなき運命を思ふに至らしめ
たればなり。

男はそのやさしくして、女にまがふべき容貌、富める市民か、古の位ある家の若殿ならん。
冬の夜をも恋人の窓の下に立ち明かし得べき力ありて、又暖き夜の私語には、女の胸の中に故
なくして泣く事を得べき人なり。女はわれ知らず、年十六にして、カルチエー、ラタンに初め
ての情を売りし「椿姫」の二世なるべきか。恋の蔓にすがりても、高きに上りて人を毒する類
にあらず、世の習慣と教義の雨風に斃れん幽愁の花のみ。あゝ、遊宴限りなき巴里の世は、鉄
道と云ひ、工業と称し、貿易と呼ぶ二十世紀に及びても、猶ほかゝるロマンスの民を生む事の
いぢらしさよ。

あゝ、美しの少年。あゝ美しの少女。長き秋の夜は早や明けんとす。肌寒き風は、帷幕を冒
せり。ピオロン弾きは疲れたり。西班牙の舞姫は椅子に倒れぬ。杯は已に空し。君等は猶ほ舞
はんとし給ふや。

うまい、凄い、鮮明である。

パリと記さずに「巴里」。スペインではなく「西班牙」。いかにも明治らしい表記からして胸がと
きめく。何かがあまく疼いて夢がはじまる。

今からおよそ百年前の、西洋になど行ったこともない読者たちが、いかにわくわくして二十九
歳の荷風の報告する巴里の華やかな夜のレストランの情景に目を見張ったか、冒頭からつよく響く。

巴里は深夜が華の時間。「料理屋」といっても食べ物為主役ではない。オペラなどの帰りのセレブたちが軽く飲んで、ワルツや音楽や、ひいては小さな色っぽい冒険をたのしむ娯楽の場である。この「カツフェー、アメリカン」はそのたぐいの中でも高級なところらしい。

金に白の内装、プロの楽隊と踊り子を見せる舞踏のショーはフラメンコか。老いた気むずかしそうな紳士の客が多い。音楽が変わると、彼らは踊り子を誘ってワルツを舞う。この大都会の権力者たちは、昼の謹厳な顔とはちがう夜の好色な顔をもつ。そういう遊楽の場所が、パリには豊かにある。

荷風の分身の「われ」はひたすら見る人。テーブルに座ったままである。はっと息をのむ。年とって太った金満家ばかりのワルツの輪の中に、お人形のようにお似合いの二人がくるくる回る。他の商売がらみのカップルとは異なり、たがいにたがいを見つめて恋する香りがほとばしる。

「若かりし。いとも若かりしよ」というつぶやきに、彼らの青春への讃嘆があふれる。荷風の筆のなぞる、ワルツの激しい動きにあえぐ少女の唇の、なんと初々しくなまめかしいことか。読む者は誰でも口づけしたくなる。

まるで二人は、小デュマあらわすところの『椿姫』のアルマンとマルグリットのよう。男はまだ少年といってもよい貴公子。女は十六歳ほどか。たぶん高級娼婦だろうけれど、椿姫とおなじく少女の純粹をここに保ち、ただ恋のために死ぬのを幸福とする「幽愁の花」の風情をただよわす。

ああ、金と権力のために争うことしか頭のない二十世紀社会の人々のなかに、いまだロマンに生きる若者もいたのだと、「われ」は感動する。秋の夜のしらじらと明け、二人が馬車をひろって乗

りこんで消える姿まで、寒い暁の風の中に立ってじっと見ている。

ロマンティックな恋人たちもすてきだが、彼らの麗しさに愕然と打たれ、立ち尽くす荷風もすてきである。

荷風にはこういうところがある。若者の恋の絶対的な味方である。彼らの青春の花に心根をふるわす。青春の恋こそ人生でもっとも価値ある果実だと思いきだめている。

荷風が鈴木春信の浮世絵を熱愛するのも、そこに春のうすべに桜のようにはかなく、ゆえに絶対の宝石として永遠にきらめく美少女と美少年の、筒井筒のおさなく烈しい恋が描かれるからだ。

そうした損得ない純な恋の輝きに見とれる荷風は、これからも彼の小説や日記の随所に出てくる。そういう荷風の感激そのものが、たぐいなく純で麗しいと思う。

燈火の巷

明治三十六年、一九〇三年七月発行の「文芸倶楽部」に発表された中篇小説である。荷風は父の命でアメリカに留学する直前の二十三歳だった。森鷗外に認められ、いよいよ作家志望をかためていた。三か所の抄出をかかげる。

『鶴元君。それじゃ失礼!』

『君。いろいろ御馳走になった、妻君に宜しく……。』と洋服の若紳士は動き出した汽車の窓から力無げに首を引込めた。

狭く限られた一等客車の事なので、他に乗手のないこの車は全く彼一人のために仕立てられた様なものだ。彼はむしろ淋し気に、身の周囲を見廻し、やがて眩しそうな目付で、窓の外に動いて行く燦爛きらびやかな夕陽の景色を眺めた——一面に赤い日光に照された別荘や農家の屋根、松、畠、岬、それらを越しては、海の上に広がる青空がまるで鏡の様に透過っている、しかし、黒い影を作る竹藪や雑木林が、突如窓に近く立現れると、もう輝く鎌倉は見えなくなつて、杉の木立の古風な神社や、松に隠れた静なお寺。洞穴ほらななの沢山ある気味悪い崖。小供や鶏さむが喧いでいる線路際の百姓家。穀物を積んだ荷馬車が待っている踏切などが、交かわる交かわる行き過ぎて、列車